

A 164 成長期小児の栄養素出納について(第1報)無機質摂取量
北大農家政 ○山東せつ子, 静修短大 古崎和代,
北大工情報 佐藤義治, 山ノ井高洋

目的 成長のための栄養素蓄積量を正確に知ることは困難であり、その研究は少ない。演者等は日常食に由来する成長期小児の栄養素出納を求めるため、2-18才の施設児童を対象として栄養調査を行ない、無機質の摂取量につき、計算値と分析値がえられたので報告する。

方法 2-18才の男女計319名を対象として1983年8月-1984年1月の3日間、個人別に食事調査を行なった。摂取無機質量を1)四訂日本食品成分表より算出、2)摂取食物の一部を採取し、常圧70-80°Cで乾燥、粉碎後、無機質の分析を行なった。分析方法は湿式分解後、Ca, Fe, Mgは原子吸光光度法で、Na, Kは炎光光度法で、PはVanadomolybdate法で比色定量により求めた。調査期間中、朝食2時間後に身体計測を行なった。

結果 1)集団構成は男女比3:2で、年令6-15才のいわゆる学令児が83%を占めた。2)体位は、身長、体重とも、同性同年令の全国平均に比し低値を示す。3)栄養素摂取量は計算値において所要量を大体充足するがVDは低値を示す。PFC熱量比は13:30:57で適正比率目標の範囲内と考えられる。Na 6655mgの2.54倍を食塩消費量と考えると16.7gとなり、適正摂取量の10.0gをはるかに越えていた。穀類熱量比は39%, 動蛋比45%, うち水産物対畜産物比は1:3.5であった。4)食事サンプルの分析値は文献値と比較可能なもので、Ca, Feが、冬期の都市部調査結果で低値を示すが、季節、産地、分析法等要因を検討中である。出納実験の一部として無機質摂取量の性、年令別単位体重当りmg数を検討した。比較可能な文献値より、Ca, Feで低く、P, Na, Mgで高い傾向を示した。